

令和元年6月20日現在

機関番号：82622

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02058

研究課題名(和文) 近現代日本における人形の創作およびその受容に関する研究

研究課題名(英文) Reserch of creating and acceptance of dolls in modern Japan

研究代表者

吉良 智子 (Kira, Tomoko)

独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・リサーチフェロー

研究者番号：40450796

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本の近代化の過程において「人形」が「女兒文化」に位置づけられ、「女性にふさわしいもの」とみなされた歴史に着目し、ジェンダー論を援用しながら近現代における「人形」の創造とその受容の様相を解明した。その結果、女性が作り手あるいは受け手として深く関わった事例(和製フランス人形の創始者上村露子、女兒文化の中で親しまれた抱き人形やファッションドール)は、ジェンダー規範のなかで誕生したが、創造者としての女性の主体性の発露や良妻賢母規範の矛盾の露呈など、従来の枠組みには収まりきらない可能性を示唆していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年重視されている男女共同参画や女性の社会進出において、政治学や経済学、社会学などの分野からの重要な提言はあるが、芸術・文化的側面からの提言はそれほど多いとはいえない。本研究は創造性における女性の主体性のあり方や新しい文化的システムの構築など、現代社会における重要な提言を含んでいる。

研究成果の概要(英文)：In this research, I analyzed "Dolls" in modern Japan in terms of gender. On premodern Japan, "Dolls" are not for only women's and girls' culture. Men were familiar with "Dolls" too. But as Japan were getting modernize, it was gendering.

In particular, I considered female doll artists and female recipients.

As a result, although many women and girls lived inside a gendered society, Kamimura Tsuyuko who created a Japanese-style doll at first opened her business in spite of an amateur and housewife, and female recipients of stuffed toys or fashion dolls loved it beyond good wife wise mother principle.

研究分野：近代日本美術史、ジェンダー史

キーワード：人形 ジェンダー 美術 芸術 フランス人形 ファッションドール

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

一般的に人形に関する研究は、民族学および美学の分野において発展してきた。それは職人によって制作された市松人形、雛人形あるいは山車などの歴史的・技術的研究が主体だった。近年では近代国家形成過程における人形の制度史的研究もさかんになりつつあるが、人形の作り手やその受容に関して、ジェンダーの視点からの研究はまだ緒についたばかりであると言って良い。

2. 研究の目的

近代化の過程において「人形」が「女兒文化」に位置づけられ、「女性にふさわしいもの」とみなされた歴史に着目し、ジェンダー論を援用しながら、現代における「人形」の創造とその受容の様相を解明する。また近現代における女性の作り手たちの創造活動を明らかにすることを通じて、創造される人形の身体と作り手の性別との連関に対する社会の期待や評価、および女性創造者の社会的位置づけを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、基本的にこれまで収集・保存・記録がなされていない一次資料の蒐集も視野にいれつつ、主に近現代において新たに創造されたジャンルの人形やその表象を軸に、ジェンダー論から人形やその概念、作り手に関して分析し、特に以下の点について明らかにすることを目指した。

(1)「人形的身体」と云う切り口から、それを創作するあるいは享受する女性たち自身の女性身体イメージとの向き合い方、人形身体イメージによる女性身体理想化と女性身体そのものの他者化について、男性の作り手との比較を視野に入れながら、明らかにする。

(2)「人形」あるいは「人形の作り手」のイメージに着目し、人形というジャンルとジェンダーおよびクラスの関連性、人形の玩具的位置づけが持つ教育的機能と低俗化の機能について、現代社会における人形表象を視野に入れ、分析する。

(3)人形を創作する女性たちの社会的位置づけを、特に男性との比較や国際的な影響関係を視野にいれながら、女性の創造力が必要とされつつも最終的には美術制度から排除された可能性を検討し、女性の作り手の歴史的不在化・不可視化、経済システムからの排除などの切り口から考察する。

4. 研究成果

主な研究成果は次の通りである。

(1)近代から現代にかけて日本の少女たちに受容された人形とその身体性に関する考察
今日人形は女兒に属する玩具とされているが、そのような概念は日本の近代化(ジェンダー化)によってもたらされた。「ままごと」などを通じて女兒用人形は「良妻賢母教育」に使われてきた。女兒たちが主に使用した人形は、「乳児的身体」でもって表わされ「妊娠」に結びつくような成熟した身体ではなかった。

戦後ソフトビニールやプラスチックなどの新素材を使用し、工場で大量生産できる人形が開発された。特にティーンエイジャーを対象としたファッションドールはセクシーな身体で形作られた。成熟した女性身体を持つファッションドールは「妊娠」可能な身体を所有しているともいえる。それらのファッションドールからは「妊娠」した人形も発売された。

アメリカのマタニティドールは若年女性の妊娠が社会問題化していることを背景に保守層からの反発を受け、出産後の女性(母)、パートナーの男性(父)、赤子のセット人形が後日再発売された。一方日本のマタニティドールは、パッケージとしては赤子が付属されず顧客からの連絡によって後日配送されるシステムがとられた。性教育の普及が遅れている日本社会がその背景にあるが、父親の不在等も指摘されている。

社会の中で生じた反発や戸惑いは人形の消費者たる未成熟な子どもと彼女たちが遊ぶ人形身体が成熟した身体であることの差異によって生まれる。女兒たちにとってそれは将来のライフコースのひとつに過ぎないが、近代社会において女兒も妊娠も国家の管理対象であり、マタニティドールは妊娠可能な身体を持っているにもかかわらず妊娠してはならないという家父長制社会における虚構のルールからのずれを見せており、現代社会における不均衡なジェンダー構造を浮かび上がらせることを論じた。

(2)近現代における女性の作り手のジェンダーの視点による再解釈

上村露子(かみむら つゆこ)は和製フランス人形の創始者として知られているが、人形史においてはその名のみが知られ、彼女の詳細なバイオグラフィや特に作品についてはどのミュージアムも所蔵せず、研究者であっても実見したものはほとんどいない。一方女性史においては、市川房江をはじめとした著名な女性たちが結成した市民的女性運動団体「新婦人協会」に参加した女性運動家であることを発掘した先行研究が存在する。本研究ではそれぞれ別の領域で語られてきた上村露子を、人形史というアリーナにおいてジェンダーの視点から分析・考察を行なった。つまり上村が自明化された女性と人形とのドメスティックな関係性を超えて、自立し、独自の戦略や芸術でもって女性たちを創作活動へと導いた点に着目した。

女性活動家としての上村の原点はその二度の結婚の破綻と新婦人協会との邂逅、そして関東大震災にある。戦前の女性運動においては、女性の社会的権利運動の重要性を重視する活動家が多いが、上村の特徴は女性の経済的自立に軸足を置いた点にある。上村が日本初の女性探偵社を設立した理由は、社会的不平等下にあった女性たちを救済する目的もあったが、起業による自身の経済的自立も含まれている。関東大震災時に女性たちの救助に奔走した後、被災女性のための寄宿舎や授産施設を設立したのは、経済的自立が真の女性解放につながることを確信したためである。

人形作家としての上村の根底には常にこうした経済的自立があった。1920年代、内縁の夫との西欧歴訪の折、パリでいわゆるフランス人形を目にした上村は研究の末ジョーゼットによる人形のマスクを作ることに成功した。特許を得たこの手法は一般に和製フランス人形が普及していくきっかけにもなった。上村はプロのフランス人形作家として活動する一方、一般向けの普及活動も同時進行させた。特に女性雑誌における和製フランス人形的手法を導入した手芸品制作の指導は、大変な人気を集め、女性たちに和製フランス人形の創作が爆発的に広がった。1930年代の人形界は、後に「人形芸術運動」と呼ばれる人形の芸術化を目指す運動が勃興していた。前近代において必ずしも女性だけが享受するものではなかった人形は、近代化（ジェンダー化）以降、女児文化に属するものとなった。その結果人形は芸術の範疇から疎外された。人形芸術運動は人形を芸術化する運動ではあったが、実態は女性をつくる人形が非芸術化されるという人形の再編成（再ジェンダー化）が行なわれた。

上村の和製フランス人形の創造と普及はちょうど同時代にあたる。上村の指導した和製フランス人形は既製品のマスクを利用したものであり、一人の人間が最初から最後まで創作を行なうという近代的アーティスト像には合致しなかった。そのため和製フランス人形は容易に芸術の領域からは疎外されることになった。ただし、あくまでも上村が目指したのは人形の芸術化ではなく、人形の創作による女性の経済的自立である。それは上村の終生一貫した姿勢である。上村が提唱した部分手芸（既製品を利用した手芸）によって得られた成果は、少なくともふたつある。一つは材料を開発し制作方法の普及につなげた上村露子という女性の成功である。女性と人形とを分かちがたく結びつける社会の中から上村という「女性作家」は誕生しえた。もうひとつは部分手芸の導入によって女性たちの創造性が高まったことである。この成功がなければ、上村自身の成功もありえず、作り手の意欲を引き出し、創作者同士の関心の共有やネットワークを創出する社会的媒体の成立は、「もうひとつの美術」としての歴史的な意味は十分にあるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

吉良智子、「近代日本における女性と人形制作 上村露子とその活動の再解釈」、『人形玩具研究』、査読有、29巻、2019、43-53

〔学会発表〕(計2件)

吉良智子、「近代日本における女性と人形制作 上村露子とその活動の再解釈」、日本人形玩具学会、2018

吉良智子、「「あるべき」女児用人形とは何か 「妊娠」した女児用人形をめぐって」、イメージ&ジェンダー研究会ミニシンポジウム「孕む身体表象 その身体は誰のものなのか?」2016

〔図書〕(計1件)

吉良智子他、青弓社、『<妊婦>アート論 孕む身体を奪取する』、2018、87-101

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
特になし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。